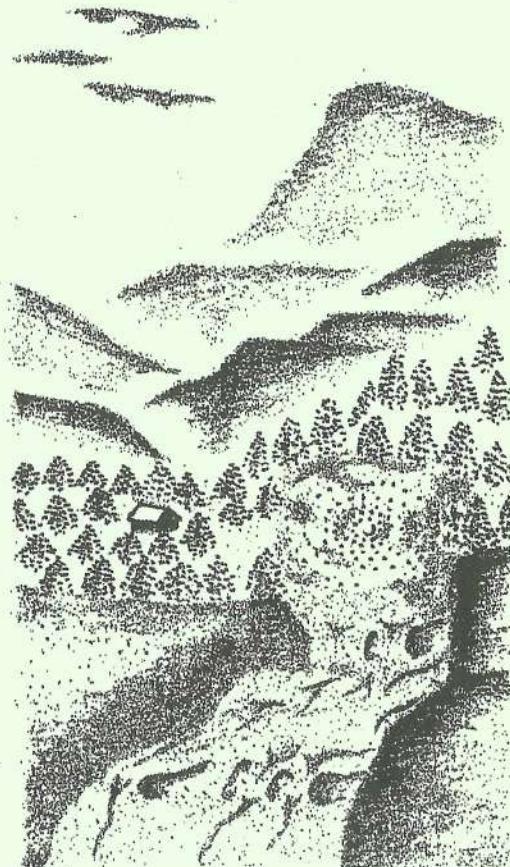


湧水 第八号 平成二十九年四月 発行

湧水



千代田岳精会 自作自詠俳句研修会

湧水第八号 目次 （五十音順）

作者俳号 名 頁

磯田鳥城	(貞二)	田尻てるよ	(映代)
岩崎泰俊	(泰俊)	徳本順治	(順治)
鵜飼てるお	(輝夫)	橋本千舟	(隆一)
神田つねこ	(恒子)	八田玄猷	(豊)
菊地駿風	(利廣)	藤原壽	(壽子)
久保合風	(合介)	細川をさむ	(修)
近藤まさき	(まさき子)	前田道人	(道紀)
塩月たかし	(崇史)	湯山得自樓	(徳次郎)
鈴木陵人	(重成)		
滝沢はる	(はる)		
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1			
18 17 16 15 14 13 12 11			

隨筆 田尻てるよ

「寒牡丹」

磯田鳥城（貞二）

被菴に紅白二輪寒牡丹

遊歩道枝に空蟬ひとつあり

何思ふ虫の音すだく通り道

認知の妻童女となりて水ぬるむ

水ぬるむ吾もあらまほし二度童子

雑草のたくましさ欲し木の葉髪

「晚学」

岩崎泰俊（泰俊）（自選）

晚学の眼鏡くもれる残暑かな

NHK

流星を待つ間の空の広さかな

NHK

競技終へその爽やかなインタビュー

朝日

沈みつつ浮きつつ一葉流れゆく

朝日

暮れの秋影に曳かれて歩きけり

朝日

秋天や眼差し遠く遠く置く

朝日

叱られて落葉蹴散らすランドセル

NHK

松過ぎて平凡な日々戻り来る

NHK

「祭り笛」

鵜飼てるお（輝夫）

背を丸め駅へと急ぎ春浅し
大川にかもめの舞ひて風光る
濡れ縁の猫背のびして桜散る
夕暮れや祭りけいこの笛弾み
向い家の剪定の音爽やかに
秋日和湯の香の中を山下る
仏前に初柿三つ供へけり
ひとりごとふえたる妻や年の暮

「小春空」

神田つねこ（恒子）

買物に遠出したるや日脚伸ぶ
鉢植ゑの苗に花芽の揃ひ出づ
風光り見渡すばかりの里景色
菖蒲田やつぼみあまたのふふみ待つ
彼岸花ただ一輪に人の列
野球する子の声高し小春空
夕映えの窓に影絵や冬紅葉
吟終へて仲間と集ふ年忘

「熟柿」

菊地駿風（利廣）

お茶でもと詩吟の仲間日脚伸び
薄ら日に木々の芽吹きや深大寺

木の芽時奥羽連山靄込む

桜咲く池之端から寛永寺

梅雨空やビル建設のクレーン伸び

朝涼やバス停に老夫婦あり

青空や木のてつへんに熟柿映ゆ

段取りを暦にしてし年用意

「柿すだれ」

久保合風（合介）

春日影僧の衣に犬じやれり

詩を吟じそぞろ歩きの余寒かな

父の日や問はず語りの独り酒

せせらぎに立つ釣り人や風薰る

柿すだれ狭間にこぼる夕日かな

堀端にひとりたたずみ秋惜しむ

顧みて今年こそはと日記買ふ

代々の墓石磨くや日脚伸ぶ

「孫あり友あり

くらしあり」

鈴木陵人（重成）

うたた寝で一息つくや日脚伸ぶ
蠢きの気配も見えで春浅し
縄跳びの記録挑むや木の芽吹く
配属地報せる声や風光る
父の日や孫のメールが届きたり
あの朝も猛暑たりとや原爆忌
音読の声のさやかに二年生
友メール又吟やるぞ柿を剥ぐ
友メール又吟やるぞ柿を剥ぐ

「雨」

滝沢はる（はる）

散歩みち肌さす風や春浅し
雨止んで木の芽の出し針もみぢ
亡き師へと吟声届け風光る
睡蓮の葉を打つ雨の音静か
東屋に座して聞き入る四十雀
小雨降る古園の静か山法師
野外能楽堂剣舞の人とにんぼ飛び
詩吟会爽やかに舞う友のあり

「から松」

田尻てるよ（映代）

五月雨葉に水玉を作りをり

艶なりや木瓜一輪の紅映ゆる

恋しさも夢多き春やダージリン

父想ひ衣紋にかける单衣かな

豆煮つつ試行錯誤や風光る

桑の実に染りし口はうそ言へず

紅い緒のぼつくりうれし七五三

から松をしみじみと見き白秋忌

「親子ゴルフ」

徳本順治（順治）

車窓より眺むけしきや日脚伸ぶ

春浅し四国路の兄三回忌

晴天に布団干しあり杉花粉

ぴかぴかのランドセル背や風光る

一陣の風に色あり花吹雪

父の日に親子連れたつゴルフかな

枝豆に塩ひと振りの甘さかな

西瓜切る孫の力の我を越ゆ

初みくじ神木の幹に蝶結び
料峭や厨に滾つ大薬缶
まんさくの花弁のよぢれリボンとも
盛り土に祠を祀り楓若葉
夫婦滝響き合ひゐて一つかな
柿簾山家二階の窓塞ぐ
枝豆や居酒屋に聞く国訛
歳晚や道路工事の黄の灯
里山に音の途絶へし除夜の鐘

「除夜の鐘」

八田玄猷（豊）

手作りの松飾り待つ施設かな
地吹雪に子を守り逝く父悲し
桜草遠き昔の園芸部
南天に今年も目白の夫婦来る
南風の国ブーゲンビリアの咲き誇る
チユーリップ原産地問ふガイドかな
枯枝の赤き彩り鳥瓜

復興の希望の証芽吹きかな
父の血の濃きは我なり父の日来

枝豆や大きな声の我がある

水引草人の縁の絡みあふ

返し針少し秋思を躲しけり

少年の皓歯さわやか夢語る

力つき落ちる柿あり我なれや

万里かな一步一步と雪の道

「初富士」

細川をさむ（修）

初富士や妻の墓へと高速路

薄ぐもり春はまだかと土竜言ふ
差し入れの筍飯を亡き妻と

雲間より富士を仰ぐや早苗月
送火焚くまた来年と孫の言ふ

濃龍胆鏡の前の白髪かな

老独り河豚鍋つつく夕餉かな

通院や今年も無事に年の暮

「〇脚の犬」

前田道人（道紀）

埋み火や未た鼻歌のつゞく風呂

木の芽生るたゞひたすらに咲く構へ
父の日や太き腕と厚き胸

句の成りて何はさておき冷奴

爽やかや三尺寝して風の友

母あらば語る夜もあり竹の春

〇脚の犬に吠えらる秋の昏

あれやこれあれど変はらぬ年の暮

「賀状書く」

湯山得自樓（徳次郎）

初夢やつひうなされて真夜中に
初場所や大金星に布団飛ぶ

ありありと木の影浮かぶ薄氷

かつてここに人住みし跡桜の木
紫陽花の道おのづから山門へ

一陣の風に揺らぎて花菖蒲

秋深し青葉てふ森に歩を留む

賀状書く遠きえにしの人名簿

随想

「七十五歳になる年に」

田尻てるよ

初めて自作自詠俳句研修会におそるおそる参加させていただきました。俳句を始めることに密かな期待があり、五七五、十七文字で、果たして自分の感じていることが表現できるのか? 「当たつて砕ける」とばかり思い切って参加。第一日目、皆様の作品と感想を聞いているうち「これは困ったな!」と思ってしまいました。

詩吟でも日本語表現の美しさ、発音の難しさに戸惑っている時でしたので、さらに自分の言葉の貧弱さにがっくりいたしました。とにかく日記のように作つてみることに致し今日に至つております。

皆様の優しさに支えられ数ヶ月続いておりますが、新しい事に挑戦できたことに万歳しております。

年を重ねて、物事を深く洞察するなど考えはほど遠く、ただ、今の私のヒラメキ・観察力を大切に俳句に表わせることを目標にして、一句一句教わりながら前進できたらと願う毎日です。

辞典を手にするのも何十年ぶり、電子辞書など使うことも初めて。新しい事に打ちのめされつつ、よちよちと歩みたい気持ちでいっぱいです。

自作自詠俳句研修会 実施事項

※ 例会 每月第二火曜日午後二時より

- ① 名句鑑賞・解説(当番制)
- ② 自作自詠
 - ・自作俳句二句の紹介と一句自詠(独吟)
 - ・俳友の感想、先生の句評
- ③ 自選一句(新聞俳壇等)、紹介と選者範吟・合吟
- ④ 翌月の兼題の選定

- ※ 行事 咲行会(原則年二回)、懇親会、その他
- ※ 句誌「湧水」年一回発行

千代田岳精会自作自詠俳句研修会 役員

参与

鈴木陵人
磯田鳥城
岩崎泰俊
菊地駿風

運営委員

顧問 前田道人
名譽顧問 湯山得自樓
リーダー 橋本千舟
サブリーダー 細川をさむ
運営担当 久保合風、神田つねこ、田尻てるよ
伴奏担当 藤原壽、滝沢はる
企画担当 鶏銅てるお、塩月たかし
編集担当 細川をさむ、近藤まき
滝沢はる、神田つねこ